卒業する、いま

新しい一歩を踏み出す人、仲間を送り出す人 ——
幼稚園から大学のみなさんに、いまの想いを聞きました。

幼稚園教諭 近藤 希望／迫田 敏幸

たいせつなあなたへ

これまで大好きな幼稚園の中で神さまに守られ、過ごしてきました。
ごっこ遊び、制作、泥団子、ロケット鬼…
あちらこちらで楽しいアイデアや明るい声が聞こえてきました。
先生たちは、みんなの持っている力にいつもびっくりしていました。
困っている友だちがいるとすぐに一緒に考えてくれましたね。
世界の平和についてもたくさんお祈りしましたね。

「お花がたくさん咲きますように」
「平和がつながりますように」
「神さまのことを忘れませんように」

神さまは、あなたのことをいつも守ってくださいます。
だから、これからも安心して歩んでいってください。

そして神さまがくださる新しい出会いの中で、
あなたの優しい心を伝えてくださいね。

新しい幼稚園になっても変わらずみんなの幼稚園です。
何かあった時には幼稚園に帰ってきてくださいね。
ご卒園おめでとうございます。

幼稚園保護者会会長 古畑 悦子

卒園・進学に向けて

娘の大好きな幼稚園の日々も、終わりを迎えようとしています。

何をするにも先生と一緒でないと不安で、引っ込み思案だった年少さん。先生から少し離れお友達との関わりが増え、お友達の存在を感じるようになった年中さん。多くの行事を通して世界が広がり、自分のことだけではなく周りも気遣えるようになってきた年長さん。

この3年間の大きな成長の根幹には、幼稚園の先生方が子ども達と真正面から向き合い、たくさん注いで下さった愛情と、神様に守られた幼稚園の生活があります。人生の土台となる幼児期の3年間をこのような環境で過ごすことができたこと、また親としても多くの学びの時間を与えて頂けたことに感謝の気持ちが尽きません。

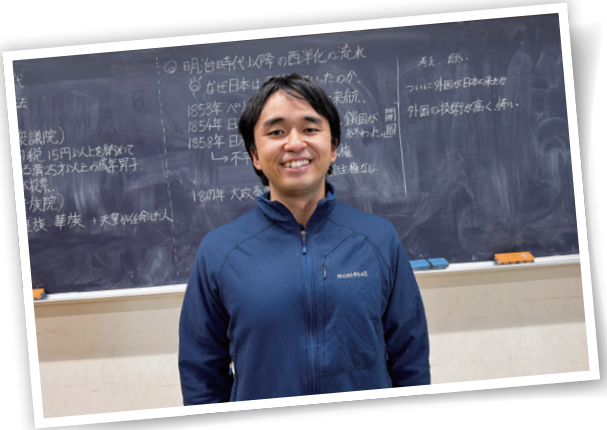
卒園を前に娘は今、何事にも自信満々に眼を輝かせ、次なるステップへの気合も十分です。これから少しずつ、より広い世界へ出ていく中で、迷うこと、悩むことがあるでしょう。そのような時も乗り越えられる、心の中に必要な強さを育んで頂けたことに感謝し、また家庭がいつまでも娘の心の基地となれる場所であるよう願っています。

初等部教諭 **真下 孝典**

これまでと変わらずに

卒業を迎える今、皆さんはどのような気持ちですか。自分の昔の記憶では、不安と緊張が大きかったように思います。推薦で中等部へ進学できる学校ではなかったので、小学校の卒業で初めて全く別の環境に身を置くことになり、友達を含め環境が全て変わることが不安でした。中等部に入学する子ども達の多くも同じ気持ちではないでしょうか。

私の場合は幸いにもすぐに友達が出来て、新しい環境に慣れていきました。一緒に入学した仲間とちょっとしたきっかけで話すようになり、友達として心を開き、受け入れてくれたのです。とても嬉しいことでした。ですから、ぜひ皆さんから行動し、仲間の輪を広げられると良いですね。そのためにも初等部の児童手帳に書いてある御言葉を思い出してください。「隣人を自分のように愛しなさい。」（マタイによる福音書22章39節） この隣人とは友達や知り合いのことだけでしたでしょうか。国や所属に関わらず、隣人を愛し、そしてその賜を共に磨き、輝かせていくことを常に祈っています。



6年 西野 早祈

神様の愛は形を変えて

初等部の礼拝は虹のようにたくさんの色に包まれている。なかよしキャンプの森の緑、雪の学校の一面真っ白な世界、洋上小学校での真っ青な水平線に囲まれた船上の礼拝。どれもまるで写真のように心の中で鮮やかに映し出される。けれどわたしの一番のお気に入りは初等部の礼拝堂での礼拝。その中でもハンドベルの奉仕のある日は特別だ。

礼拝堂の冬は寒く、夏は暑いがそんな小さな欠点なんて吹き飛ばすくらいの魅力がある。それは礼拝堂のステンドグラスから差し込んでくる光だ。ハンドベルに光が当たると反射して力強く広がる。黄色やオレンジ色の光を全身に浴びると、イエス様が洗礼を受けた時に差し込んできた光や舞い降りてきた白い鳩が想像できる。私の心にひたひたとパワーが溜まり、身体中に行きわたる気がして、二年生で洗礼を受けた時を思い出す。牧師先生が私の頭をそっと押した時に伝わってきた力や、水の中から出てきた時の光のまぶしさだ。

神様の愛が光となって私の初等部生活はたくさんの色に守られ、成長してきた。

中等部教諭 井上 祐貴

神はいるのか、いないのか

先日、大学食堂で昼食をとっていると、ある卒業生が話しかけてきた。雑談すること1時間以上。その卒業生に質問された。「先生は、なんで神様を信じているんですか？」

神の存在を証明してほしいって？　それは、無理です。私は人間（有限な存在）であって神（万能な存在）ではないから。人間の理性で神の存在を証明できるのなら、それによって証明された神は、もはや神ではないでしょう。理神論で神の存在を突き詰めていっても、「おそらく神はいるだろう」ってところまでしか辿り着けない。じゃあ、何で神がいるって信じているかって？　それは、神様から「信じたい」という思い（＝信仰）を与えられたから。だから、信じるか信じないかは個々人に委ねられた問い。でも私は思う。神様がいると信じて歩む人生は、とても心穏やかなものだ、と。別に、「洗礼を受けろ」って言っているわけじゃない。青山学院で過ごしたことの財産は、神がいるか否かの問いが与えられたこと。ぜひ、これからの人生を通して、自分なりの「神はいるか否か」の答えを探してみてほしい。

3年 山本 龍雅

礼拝と音楽

まもなく中等部を卒業します。三年間を振り返ると、僕の傍らにはいつも「音楽」がありました。日々、中等部で出会う音楽、チャイムの曲名、礼拝の音楽、音楽の伊藤先生はいつも、曲名を教えて書いて下さいました。僕の好きな曲を礼拝で弾いて下さる時もありました。クリスマス礼拝の聖歌隊では響き合う歌声に神秘的な空気が漂い神様を近くに感じた瞬間もありました。母の日礼拝でのチェロの演奏。皆の心に音楽が伝わったことも嬉しい思い出です。ハンドベル部ではお互いが助け合い励まし合い、一人一人の音で友情が繋がり初めて一つの音楽が出来ること、そしてみんなで演奏する喜びの輪が、平和の和に変わることを学びました。音楽って誰のために何のために奏でるのか、そんなことも考えるようになりました。

僕が中等部で経験した音楽には、その瞬間、その一時の音楽に一緒に耳を傾け、同じ空気を感じ、一緒に何かを思う仲間や先生方が常にいました。音楽から友情や繋がりや信頼も学ぶことが出来ました。忙しい毎日の中にそんな豊かな時間があった中等部生活に感謝しています。毎日、魅了されたパイプオルガンの音色が聴けなくなるのは寂しいですが、高等部へ行っても豊かな時間持つことを大切に将来に向かって邁進していきたいです。

高等部教諭 山田 徹

旅するあなたへ

「旅するあなたへ
どしゃぶりでも　嵐でも
どんなにつらくても悲しくてもすべて神の決められたこと。
神の腕に飛び込むための旅は、いつも、神のまなざしの中。
大丈夫、大丈夫、どんなことだって明日を生きていく力になる。
すべて、神の決められたこと。
本当の幸せのために神の決められた旅」

この詩は私が社会人になる前にあるクリスチャンの方からいただいたものです。

これからの歩みの中で様々なことがあるでしょう。その中には受け入れがたい現実に直面したり、自分の思いに反するような出来事が続くことだってあるかもしれません。しかしそのようなときに運命を恨むのではなく、この人生は神から与えられたものなのだから無意味であるはずがない、不条理であるはずがない、そして神は最終的に万事を益としてくださると信じて積極的に生きていく態度を選択していくこと。それがこれからの旅を続けていく上で大切であると思います。

卒業生一人ひとりが心豊かに愛をもってそれぞれの旅を続けていくことができますように心から祈っています。

3年 渥美 孝文

サーバントリーダーになるということ

僕は高等部でフェンシングという見たこともないスポーツに挑戦しました。最後の1年間では男子部長を任され、日々、より良い部活動をめざし奮闘しました。どうやったら強くなれるのか、みんなのモチベーションを上げることができるのか、など様々なことを考える必要がありました。強いチームを作っていく上でトップに立つ監督や部長の存在はもちろん重要になってきますが、チームのために貢献しようとする部員の存在も同様に重要であると思います。それらの人は所謂リーダーではないですが、縁の下の力持ちの役割を果たしてくれます。聖書が言う地の塩、世の光とはこの様な人々のことを指しているのではないかと思います。

青山学院は僕たちが地の塩、世の光として仕える者（servant）になるために最適な場所です。青山学院が目指すサーバントリーダーになるということは、目に見えるかどうかは関係無しに世の中の役に立つということだと思います。青山学院という神様を身近に感じる環境で、役に立つとは何かをこれからも考えていきたいです。

経営学部教授 玉木 欽也

さらなるプラスと、マイナスはプラスへ

ローマの信徒への手紙８章28節

卒業される皆様に、神様と共に歩む上での人生のポイントを2つの視点から贈ります。

1.『さらなるプラス』のポイントは、「未来志向」と「人生の目標」を理解していること

神様が、私たち一人ひとりに人生の計画を示してくださる時は、いつも「未来志向」です。私たちが、まだ見たことがなく、考えたことがない世界を啓示されることがあります。神様は、私と助け人の働きを通して、神様と社会そして人々の役に立つことを実現したいと願っています。

その際、私の「人生の目標」は、自分のためにだけ生きるのではなく、上述したように神様と同じ思想や信念をもっていることが大切です。しかし神様の計画は、たやすく成し遂げられるものではなく、後述するようにいく度の艱難を、神様の助けを求めつつ乗り越えていかなければなりません。

2.『マイナスをプラス』のポイントは、「自分の欠点や失敗」を認め「神の助け」を求める

他の人と比べる生き方（劣等感または優越感）ではなく、「物事の判断基準」を神様からみて正しいのかを基軸におく生き方です。日々の生活の中で、自分の欠点や弱点が何かを、自分自身で認める。それにより、他の人の弱さや失敗も赦すことができます。

自分だけでは何もできないことを悟り、神様に助けを求める。その際の信仰の武器として、神の言葉を聞く聖書、神と語り合いをする祈りと讃美歌、聖霊の内住があります。

総合文化政策学部　森 有彩

雨も雪も、ひとたび天から降れば
むなしく天に戻ることはない。
それは大地を潤し、芽を出させ、
生い茂らせ　種蒔く人には種を与え
食べる人には糧を与える。

イザヤ書55章10節（新共同訳）

雨と恵み

大学生活4年間を振り返ると、1年次はコロナ禍と共に大学生活が始まり、とても楽しみだった大学1年間が一瞬にして消え去ってしまった喪失感に打ちのめされていました。2年次以降は、コロナ禍が落ち着き、対面の授業が再会されたので「リアルな大学生活」を送れる様になりました。対面授業、ACFでの課外活動、人間関係などを通して、その場で経験することの喜びを改めて感じ、私は当たり前である事に一層、神様の慈しみを感じ、感謝するようになりました。

コロナ禍で制約のある時間、「雨」を過ごしたからこそ、その後の学生生活で友達と一緒に時を過ごせることが私にとって貴重で輝いていた瞬間でした。

社会人として歩む中で、多くの「雨」を経験するかもしれません。しかし、その時の経験が次の道への道標であること、また常に神様が共におられることを覚えて歩んでいきたいです。